

大宰府条坊跡

第 112 次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

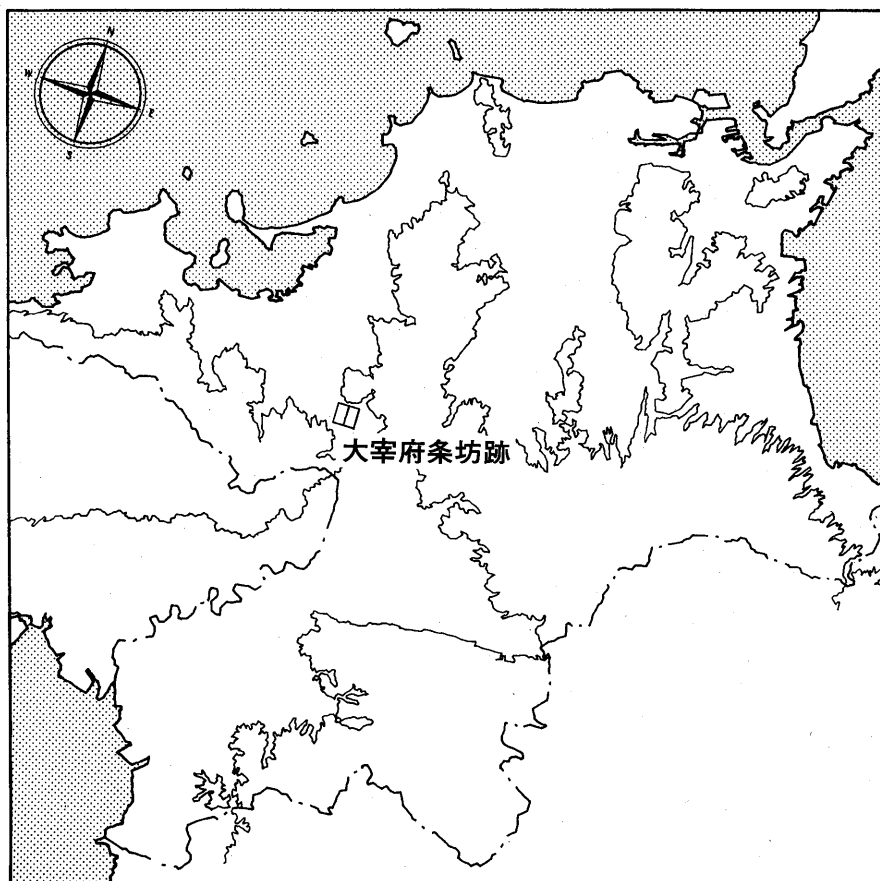
第 31 集

1 9 9 2

筑紫野市教育委員会

大宰府条坊跡

第 112 次発掘調査



序

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中央に位置します。東西から山々が迫り、その間に肥沃な平野をもつ当市は、太古から北部九州沿岸と九州の内陸部を結ぶ交通の要衝として栄えてまいりました。今日までの発掘調査でも中国製の青銅器や陶磁器などが発見され、市の北部は大宰府条坊の一部だったようです。日本で最も古い城である基肄城の一部や塔原廃寺、杉塚廃寺といった寺院跡の遺跡が点在します。また、大宰府から豊前へ通じる官道も当市を通り、近年の発掘調査では万葉集に詠まれた蘆城駅家の跡と思われるものも発見されました。このような歴史に育まれた当市には、たいへん多くの遺跡があります。そして大規模な開発から小規模な建築まで、多種多様の工事が実施されています。今日的な人々の営みのなかで、後世に伝えて行くべき義務を負う文化財を保護するため、さらに努力を重ねる所存でございます。

最後になりましたが、今回の発掘調査にご協力いただきました方々につきまして、衷心よりお礼申し上げますと共に、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深める縁ともなれば幸甚に存ずる次第でございます。

平成4年3月31日

筑紫野市教育委員会

教育長 永 淵 正 敏

例 言

1. 本書は専用住宅建築に伴い筑紫野市教育委員会が実施した、筑紫野市大字杉塚48-1、49-2の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は筑紫野市がナガタ建設株式会社と埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し実施した。
3. 発掘に係る実測・写真撮影は奥村俊久が行ったほか、東亜測量設計株式会社（現場代理人：中野義孝、技術者：白水寿一）に空中写真測量を委託した。
4. 出土遺物の実測は森部順子と奥村が行った。
5. 製図は森田くみ子が担当した。
6. 出土遺物の写真撮影は奥村が行った。
7. 本書の執筆・編集は奥村が行った。

目 次

I 調査に至る経過	1 頁
II 位置と環境	1
III 調査の内容	4
IV まとめ	10

挿 図 目 次

第1図 調査地点周辺遺跡分布地図（縮尺1/25,000）	2 頁
第2図 調査地点周辺地形図（縮尺1/2,500）	3
第3図 SK 遺構実測図（縮尺1/60）	4
第4図 SK 遺構実測図（縮尺1/60）	5
第5図 SD001土層断面図（縮尺1/40）	6
第6図 SX006遺構実測図（縮尺1/60）	7
第7図 SK 出土土器実測図（縮尺1/2）	7
第8図 SK 004 脇出土土器実測図（縮尺1/3）	7
第9図 SD 出土土器実測図（縮尺1/4）	8
第10図 SX 出土土器実測図（縮尺1/3）	9
第11図 SD 出土縄文土器実測図（縮尺1/2）	9
第12図 SK004脇出土銅銭拓影（縮尺2/3）	9
第13図 前田遺跡・大宰府条坊跡第112次発掘調査遺構配置合成図（縮尺1/200）	10

付 図

大宰府条坊跡第112次発掘調査遺構配置図（縮尺1/100）

I 調査に至る経過

平成2年2月26日付けで、専用住宅2棟建築に伴い筑紫野市開発行為等整備要綱に基づき、事業者から筑紫野市都市計画課に事前協議の届出がなされ、市都市計画課から市教委社会教育課に協議があった。当該地は大宰府推定条坊跡の範囲内にあることから、申請者に対し、試掘調査と文化財保護法57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が必要な旨を伝えた。同年3月5日に事業者から試掘調査の申請と埋蔵文化財発掘の届出がなされ、3月17日に試掘調査を行った。試掘調査の結果、照会地中央部の表面耕作土下位から積み重ねられた土師器坏と連なった銅銭を検出した。市教委では3月23日に申請者に試掘調査の結果を回答するとともに、県教委に進達した。平成2年4月13日付けで県教委より事前に発掘調査を実施する旨の、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について通知があり、市教委は直ちに申請者に伝達した。平成2年5月18日に申請者から市教委に発掘調査の依頼があり、その後、協議を行ったが、発掘調査は市のスケジュールもあり平成3年度に実施することとなった。平成3年7月1日に事業者と筑紫野市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同日、埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。発掘調査は7月18日から開始した。

なお、調査組織は下記のとおりである。

総括	筑紫野市教育委員会	教育長	永渕正敏
庶務	筑紫野市教育委員会 社会教育課	課長	竹田征治
	〃	文化財係 係長	山野洋一
	〃	主事	奥村俊久
調査	筑紫野市教育委員会 社会教育課 文化財係	主事	奥村俊久

II 位置と環境

筑紫野市は福岡平野と筑紫平野の接点に位置し、三郡山塊と背振山塊に挟まれた狭長な平野部は古代から交通の要衝であった。さらに市の北部は、推定大宰府条坊跡^{註1}の範囲に入る。市内には杉塚廃寺^{註2}や塔原廃寺^{註3}などの寺院跡の外、鴻臚館から大宰府に至ると推定される官道や朱雀大路の一部も発掘された。

今回の発掘調査地点は、筑紫野市大字杉塚48番地の1、49番地の2に位置する。鏡山猛氏の推定条坊では、右郭九坊十九条に当たる。

註

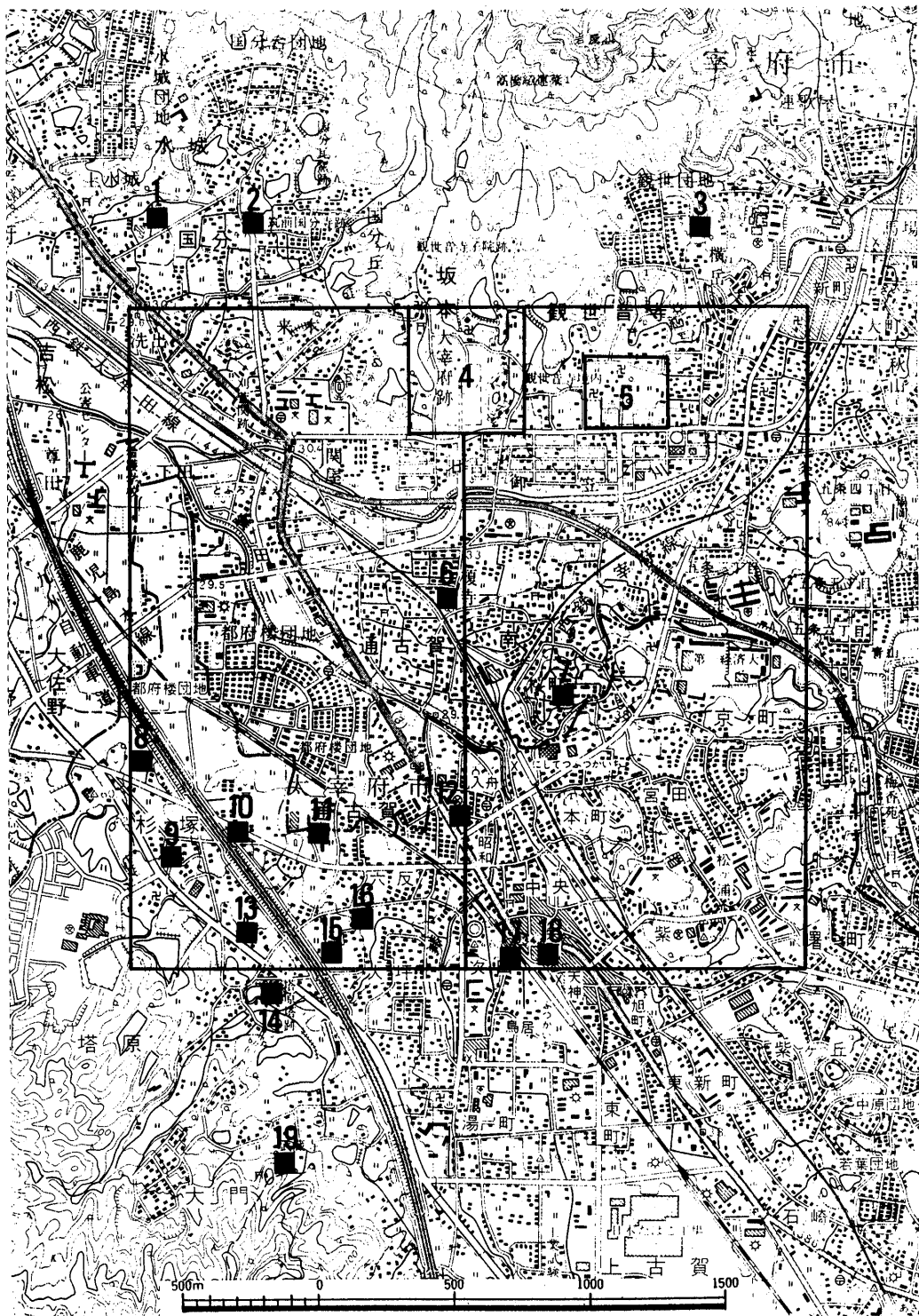
註1 「大宰府城郭の研究」 鏡山 猛 1928

註2 杉塚廃寺 筑紫野市文化財調査報告書第4集 筑紫野市教育委員会 1979

註3 塔原廃寺 福岡県文化財調査報告書第35集 福岡県教育委員会 1967

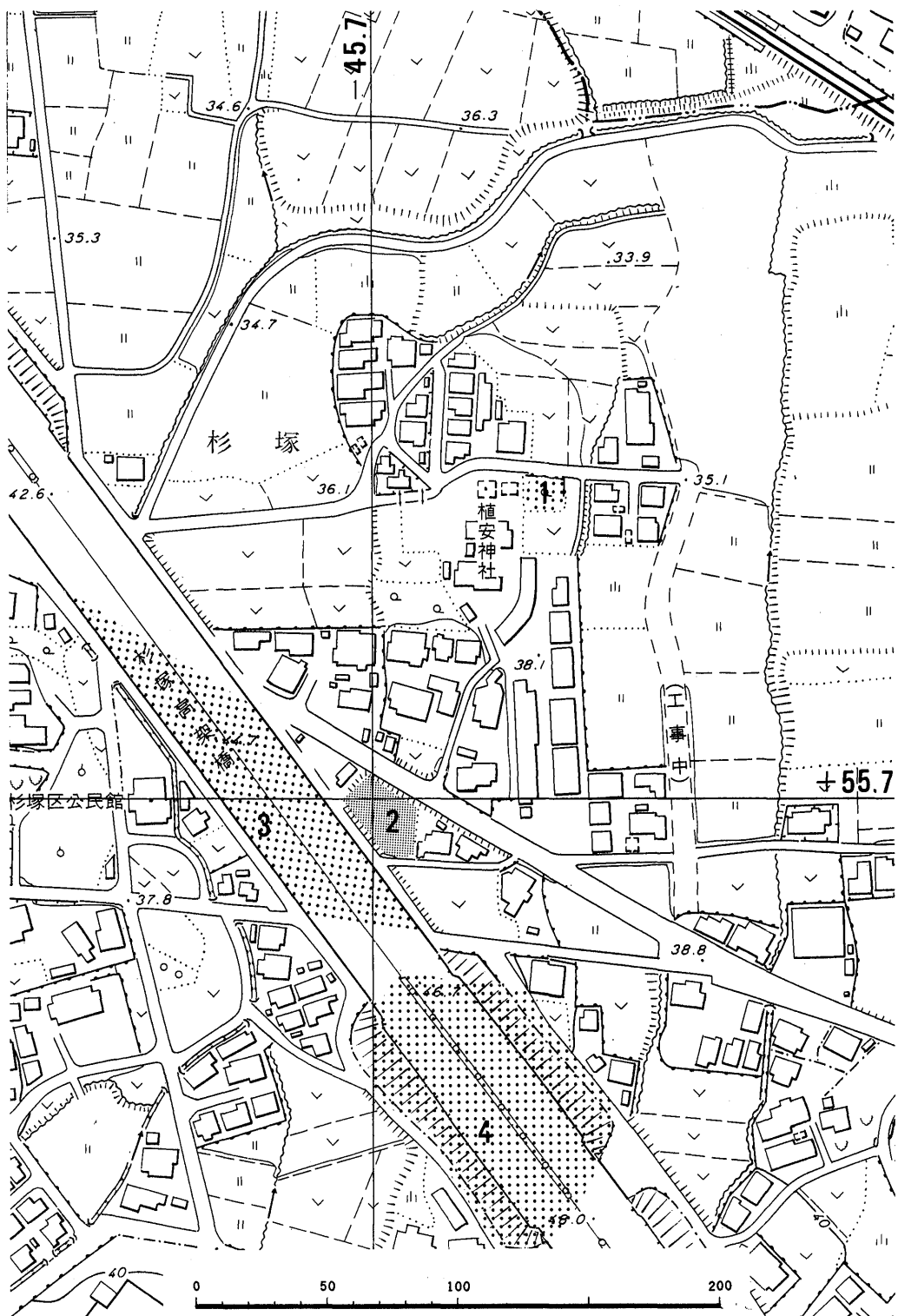
註4 大宰府条坊跡第99次発掘調査 1990年発掘 未報告

註5 大宰府条坊跡第107次発掘調査 1991年発掘 未報告



第1図 調査地点周辺遺跡分布地図(縮尺1/25,000)

- | | | | |
|-----------|----------|---------|----------|
| 1 筑前国分尼寺跡 | 2 筑前国分寺跡 | 3 崇福寺 | 4 大宰府政庁跡 |
| 5 観世音寺 | 6 櫻寺 | 7 般若寺跡 | 8 条99 |
| 9 杉塚廃寺 | 10 条112 | 11 条86 | 12 条107 |
| 13 条82 | 14 塔原廃寺 | 15 条103 | 16 条113 |
| 17 条85 | 18 条114 | 19 武蔵寺 | |
- ※ 条○=大宰府条坊跡第○次発掘調査地点



第2図 調査地点周辺地形図 (縮尺 1/2,500)

- 1 植安神社古墳 2 大宰府条跡第112次発掘調査地点 3 前田遺跡 4 唐人塚遺跡

Ⅲ 調査の内容

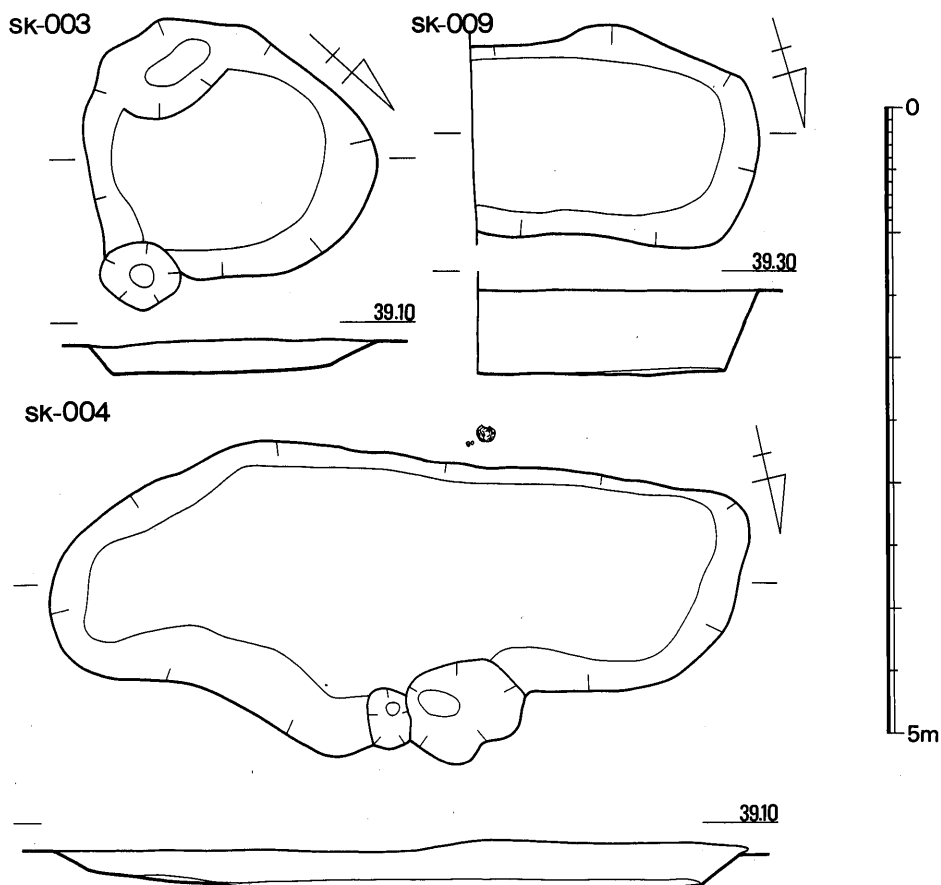
遺構

500㎡を発掘調査した。遺構は土壌9基、溝状遺構4条、性格不明遺構1基とピットが検出された。

SK003は2.4～1.9mを測る不正円形のプランを呈す。深さは25cmを残す。

SK004は壁体が崩れているが、5.4×1.8m程の長方形プランを呈すものと思われる。深さは30cm余を残し、主軸をN-77.5°Wに方位をとる。中央部南壁脇に土師器坏と銭が残されていた。坏は積み重ねられ、銭は連なる状態である。試掘時点でバックホーで上部を当てたため残りは悪い。

SK009は調査区外へ延びる。幅は1.5m程で長方形プランを呈すものと思われる。深さは約



第3図 SK遺構実測図(縮尺1/60)

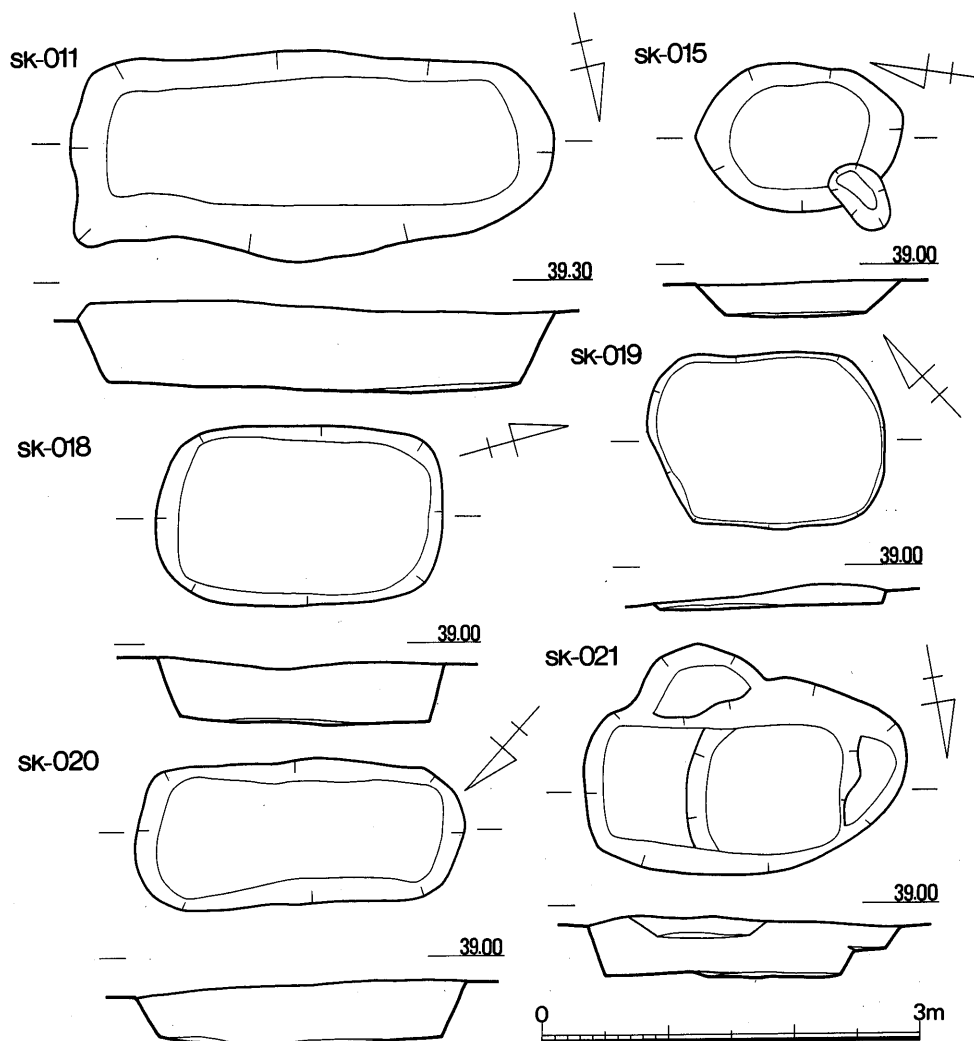
70cm、主軸を N-74°W に方位をとる。床面は平坦で、壁体はほぼ直立する。

SK011は調査区外へ延びる。3.8×1.4m 余りで長方形プランを呈す。深さは約60cm、主軸を N-76.5°W に方位をとる。床面は平坦で、壁体はやや傾斜して立つ。

SK015は1.6~1.2m を測る不正円形のプランを呈す。深さは20cm余りを残す。

SK018は2.3×1.4m を測る長方形プランを呈す。深さは約50cm、主軸を N-15°E に方位をとる。床面は平坦で、壁体はほぼ直立する。

SK019は1.8×1.4m を測る略方形プランを呈す。深さは10cm 足らずで残りが悪い。主軸は N-48°W に方位をとる。



第4図 SK 遺構実測図 (縮尺 1/60)

SK020は2.6×1.2mを測る長方形プランを呈す。深さは約40cm、主軸をN-48°Eに方位をとる。床面は平坦で、壁体はやや傾斜して立つ。

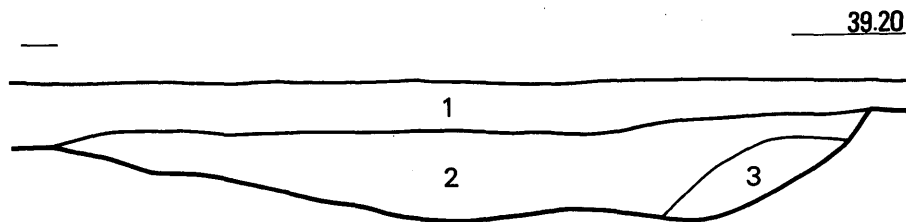
SK021はピットに切られ明瞭さを欠くが、本来は2.2×1.5m程の長方形プランを呈すものと思われる。深さは約40cmで、床面は西半が僅かに低い。主軸はN-81°Wに方位をとる。床面は平坦で、壁体はほぼ直立する。

SD001はSK009に切られる。最大幅4.2mを測り、弧を描き調査区の南部を巡る。床面は東側へ向かって緩やかに傾斜する。検出した部分のほぼ中央から、床面よりやや浮いて4個の礫が検出された。

SD002はSK019とSK020に切らる。SD001と逆方向の弧を描き、北半を巡る。床面の傾斜は一定していないが、段を介し東から西に低くなっているようである。またSD001と同様に検出した部分のほぼ中央から、床面よりやや浮いて礫が検出され、一部が赤変しているものも見られた。

SD022はSD001の西側で検出し、SK021に切らる。SD001と同方向の弧を描く。

SD023は調査区の西端で検出した。SD002を切る。やや蛇行しながらもN-37°Eに方位をとり直線的に延びる。最も深いところで42cmを測り、断面逆台形を呈す。



第5図 SD001土層断面図(縮尺1/40)

1 耕作土 2 黒褐色土層 3 黒色土層

SX006は調査区南端で検出した。全体に残りが悪く、不明瞭である。西端部は5×4mの方形プランを呈し、周辺に浅い掘り込みを巡らす。この遺構の南壁に沿って幅1m余りで帯状に延びる。

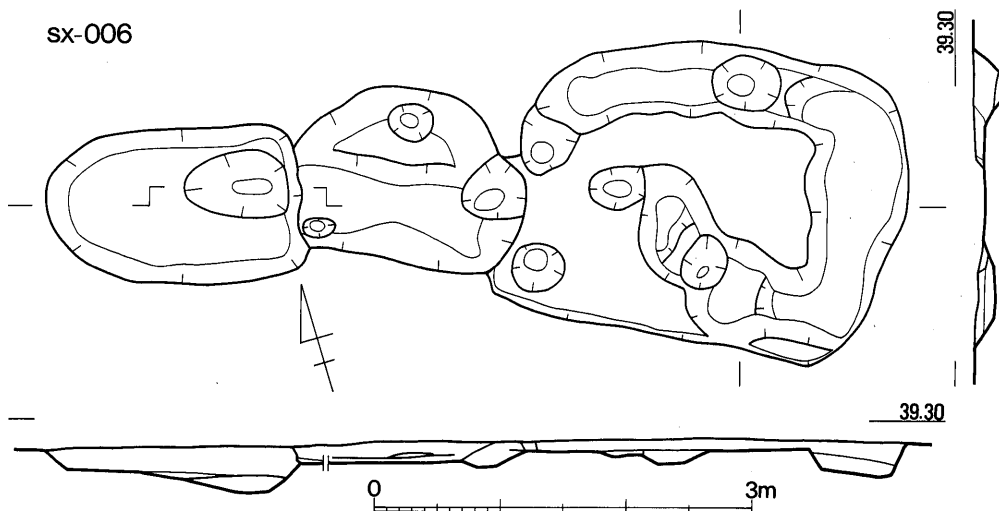
遺物

1はSK021から出土した土師器の甕と思われるものの小片で、外面に墨書が残る。中央の「宿弥」は読み取れるが、その前後、及び右の文字は不明である。

2～10はSK004の脇に置かれていた坏である。口径12.9～13.7cm、器高2.5～3.3cm、4.6～6cmを測る。比較的、径が小さい底部から直線的に大きく開く形態を呈し、底部は糸切りを行う。

11～15はSD002の礫の東から出土したもので、ほかの部分からはほとんど遺物の出土を見な

sx-006

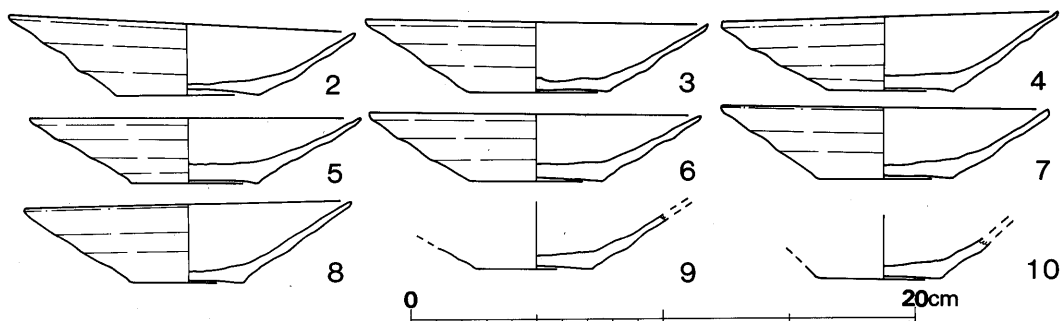


第6図 SX006遺構実測図 (縮尺1/60)

かった。11は須恵器の坏蓋で約1/2程度が残る。平坦にヘラ削りされた天井部の中央には撮を取り付けた跡が残る。体部は緩やかに下り内面のかえり端は口縁端部とほぼ同じ高さに貼付される。12は須恵器の高坏坏部と考えられ、1/5程が出土した。口縁部は如意状に外反し、端部は僅かに上方に延びる。口縁下に2条、体部上位に1条の断面三角形の細い凸帯を巡らし、その間に櫛書波状文を描く。13は須恵器の甕の胴部の破片である。外面は格子目の叩きの後、体部下位から上をカキ目により消す。内面は青海波文の当具痕がそのまま残る。14は土師器の甕で1/2余りが



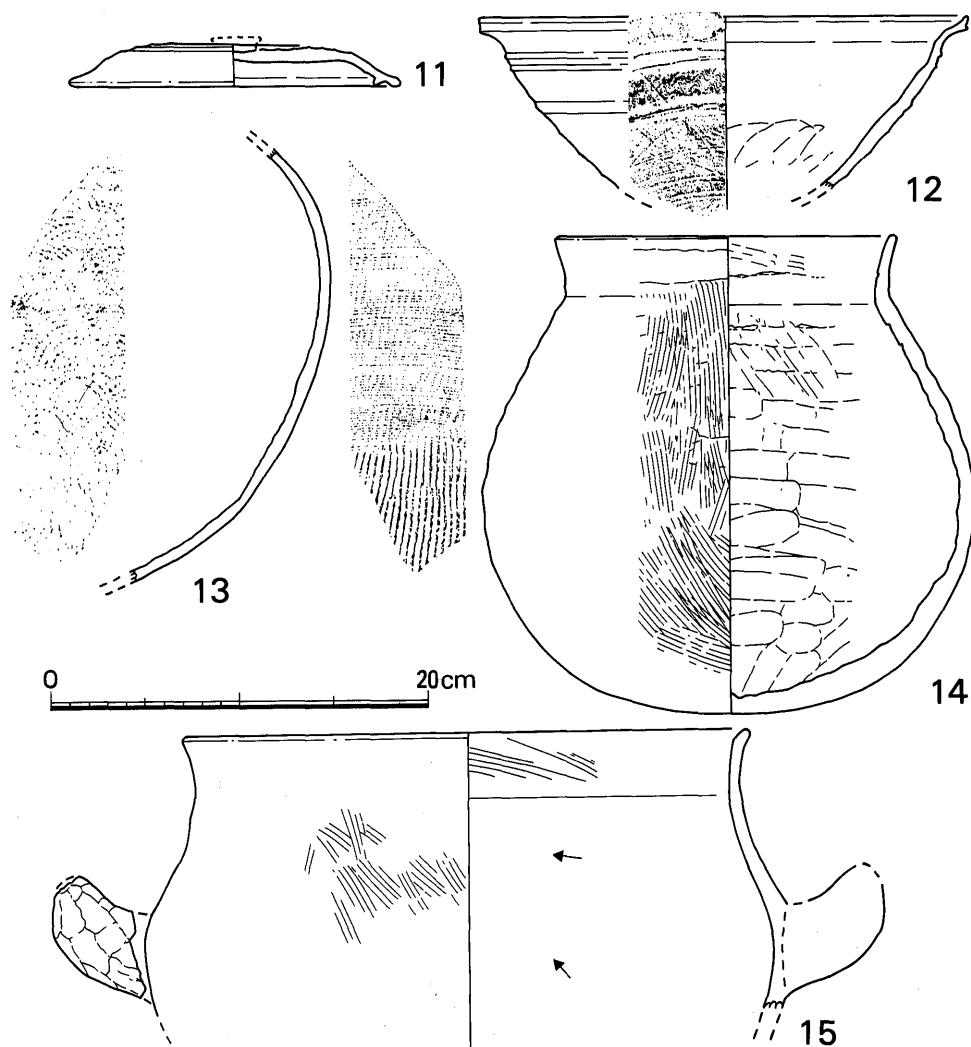
第7図 SK 出土土器実測図 (縮尺1/2)



第8図 SK 004 脇出土土器実測図 (縮尺1/3)

残る。口縁部は僅かに外傾して立ち、頸部の締まりは弱い。胴部の中位下部に最大径をもち、上半部は直線的に内傾し頸部へ至る。下半部は丸味をもって、丸底の底部へ続く。外面口縁部はヨコナデされ、胴～底部は縦方向の刷毛目が施される。内面口縁部は横方向に粗く刷毛目を施した後、ヨコナデする。頸部以下はヘラ削りされる。15は土師器の甑で、口縁部から把手貼付部までの小片で、復元口径はかなりの推測を含む。口頸部は浅く外反して立つ。把手貼付部に最大径をもつと推測される。把手はヘラで形を整えられる。外面口縁部はヨコナデされ、胴部は斜方向の刷毛目が施される。内面口縁部は横方向の刷毛目が施され、頸部以下はヘラ削りされる。

16は SX006から出土した須恵器坏蓋で、1/4 程が残る。天井部はその大半を回転ヘラ削りさ



第9図 SD 出土土器実測図（縮尺1/4）

れ、甘い段を介し、僅かな膨らみをもち直立する体部へ至る。口縁部は僅かに外傾し、内面に段を有す。

以上のほか図示しなかったものとして、SK004から鉄釘片1点、SK003とSK009は各鉄滓1点、SK011は鉄滓2点、SK018は青磁片3点と炭小片3点が出土した。鉄滓はSD001・002・010・022、SX013からも出土してい

る。また17はSD002から出

土した曾畑式土器である。

滑石を含まず、長石、雲母粒を含む在地系の胎土であ

る。口唇部に刻みを施し、

口縁下内外面に1列の刺突

を巡らす。外面は縦、横方

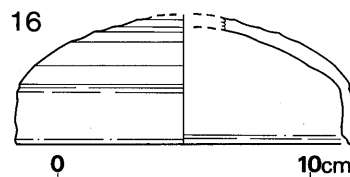
に短沈線で箱形に矩形を重

ねるもので、内面は横方向

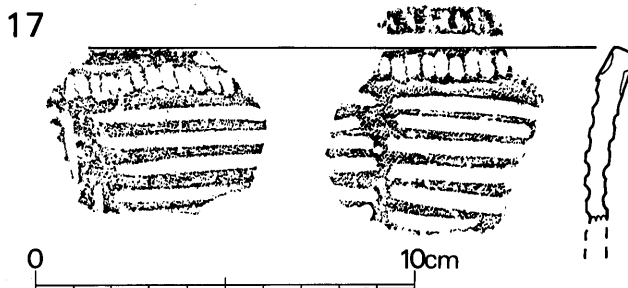
の単沈線を幾段か巡らす曾

畑式土器としては後出的なものである。

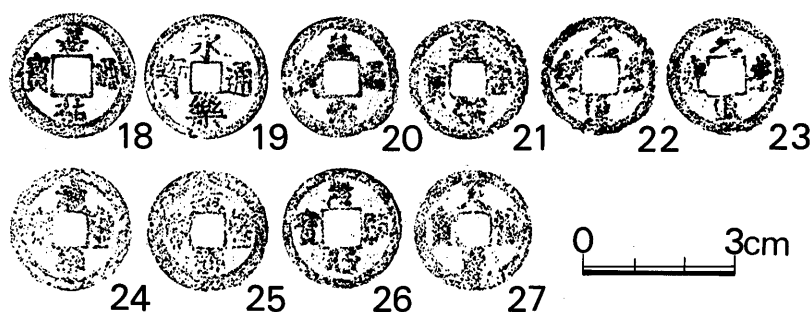
18～27は2～10と伴出した銅銭である。嘉祐通寶1点(18)、永樂通寶1点(19)、皇宋通寶2点(20・21)、元豐通寶4点(22～25)、判読困難なもの2点(26は元豐通寶、27は天禧通寶の可能性が高い)が出土した。永樂通寶以外は銅質が悪いためか残りが悪く、元豐通寶はその傾向が顕著である。



第10図 SX出土土器実測図 (縮尺1/3)



第11図 SD出土縄文土器実測図 (縮尺1/2)



第12図 SK004脇出土銅銭拓影 (縮尺2/3)

IV ま と め

今回の発掘調査地点は前田遺跡の北東側の隣接地で、内容としては同一の遺跡である。第3図は写真等をもとに前田遺跡と本調査区を合成したものであるが、必ずしも明確ではなく参考程度に止めていただきたい。

今回明確には出来なかったがSK004、SK009、SK010、SK018、SK020、SK021はその形状から墓の可能性が高く、同じく土壌墓の可能性を示す前田A-1、A-2土壌と同じ一群とも考えられる。時期については共伴の遺物がなく明らかにし得ないが、SK018の埋土内に青磁片が混ざっていることで鎌倉時代以降の可能性が高く、SK004の脇に置かれた土師器の時期になる可能性も否定できない。とすれば15世紀初頭というところであろうか。

SD001、SD002、前田B-2溝など円状の弧を描く溝状遺構が見られる。これらの遺構に明確に伴う遺物は無いが、SD002の埋土内からは時期差は認められるものの古墳時代の遺物が多く、また前田B-2溝からも古墳時代の遺物が出土し、これらよりやや時代が上る古墳の周溝の跡と考えるのが現時点で最も妥当であろう。またSX006はSD001の内部主体と推測され、出土した須恵器小片と前述の状況から6世紀初頭の年代を与えても良いのではなかろうか。

前田遺跡と同様、今回も多く鉄滓の出土を見た。また、北西350mからは製鉄に用いる白炭を焼くためといわれる炭窯も検出されており、付近に製鉄遺構があるのはほぼ間違いなさそうである。

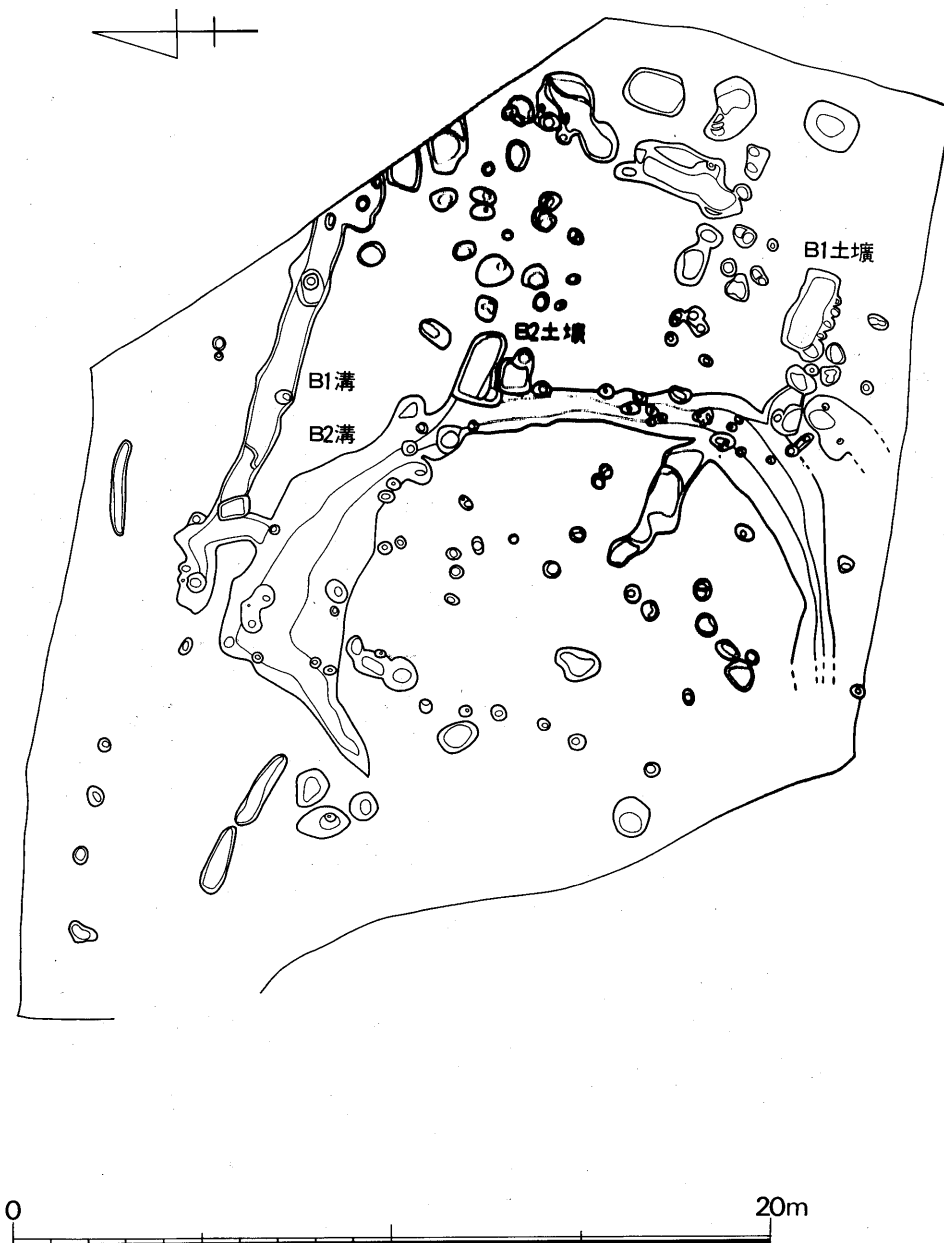
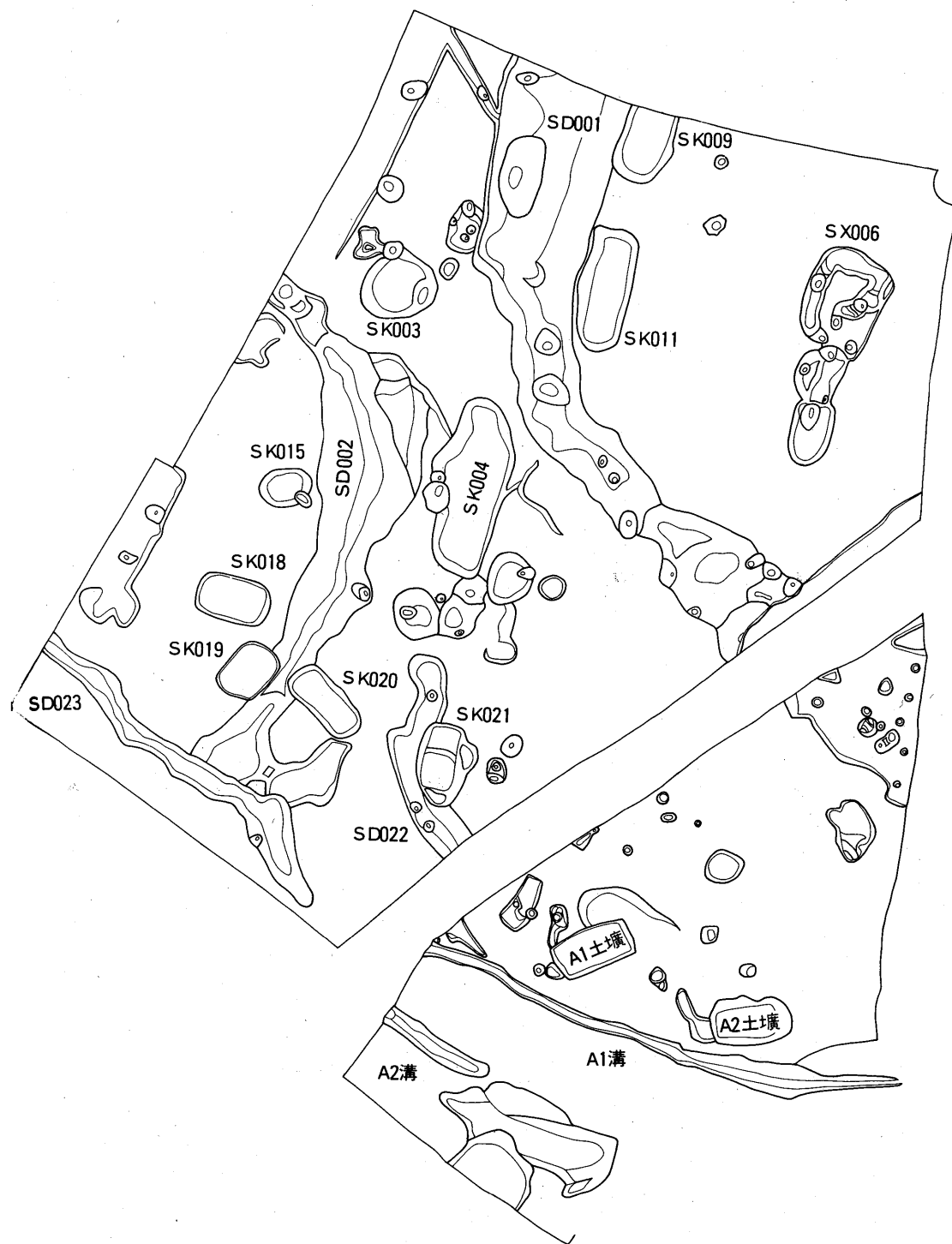
註

註1 「前田遺跡の調査」 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅧ 1977 福岡県教育委員会

出土遺物法量表

(単位cm)

番号	口 径	器 高	底 径	色 調	番号	口 径	器 高	底 径	色 調
1				にぶい橙色	10			5.1	にぶい橙色
2	13.7	2.5~3.2	5.6~6	にぶい橙色	11	17.4	残存 2.3	—	暗灰色
3	13.6	2.6~3	5.6	にぶい橙色	12	25.6			暗灰色
4	13.3~13.5	2.7~3.2	5~5.2	にぶい橙色	13				暗灰色
5	13.1	2.6	5~5.2	にぶい橙色	14	17.8	25.4	25.9	明褐色
6	13.1~13.3	2.6~2.8	5.2~5.4	にぶい橙色	15				明褐色
7	12.9~13.1	2.6~3	5.4	にぶい橙色	16	13.3	残存 5.1	—	暗灰色
8	12.9	2.9~3.3	4.6~4.8	にぶい橙色	17				にぶい橙色
9			4.6	にぶい橙色					



第13図 前田遺跡・大宰府条坊跡第112次発掘調査遺構配置合成図 (縮尺 1 / 200)

図 版



遺跡より博多方向を望む





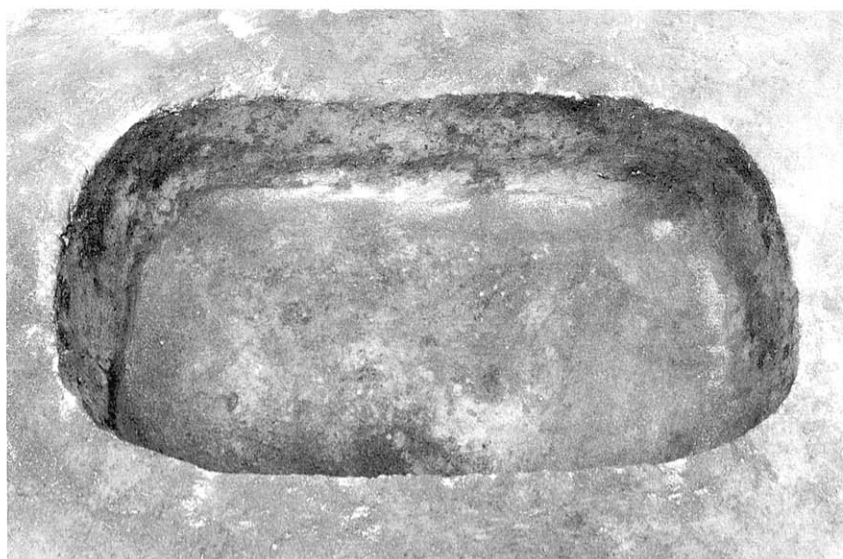
SK004



SK009



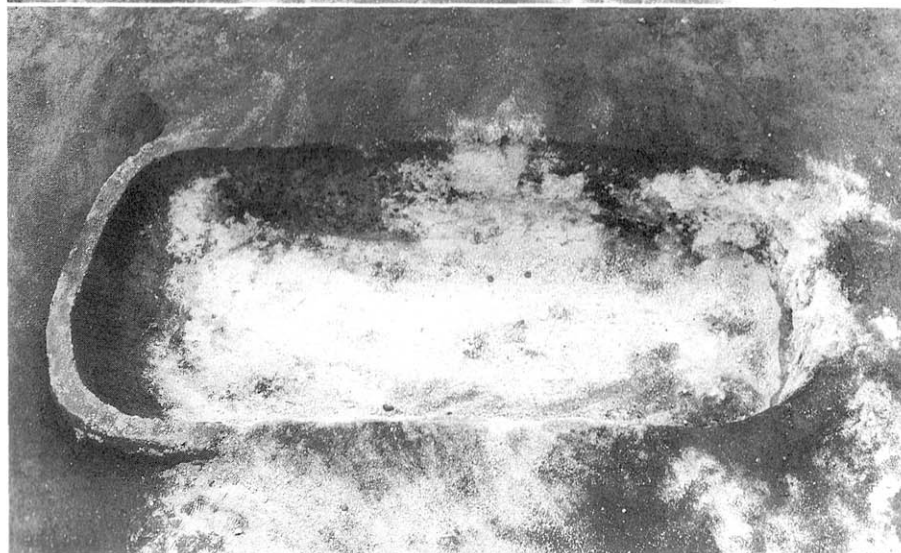
SK011



SK018



SK019



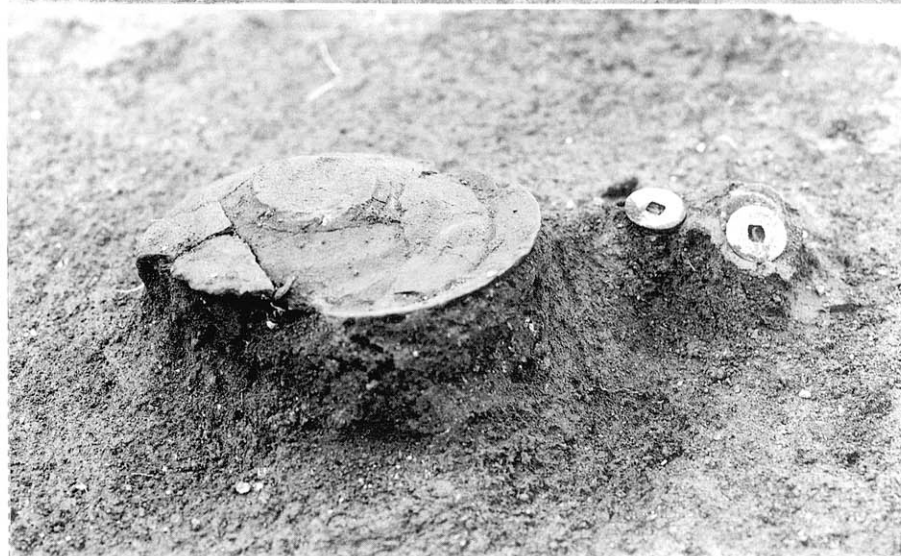
SK020



SK021



SX006



SK004 脇
坏・銭出土状況



1



2



3



4



5



6



7



8



18



19



20



21



22



23



24



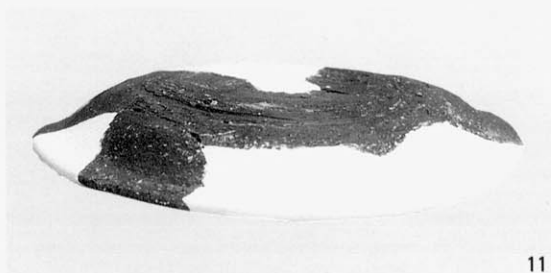
25



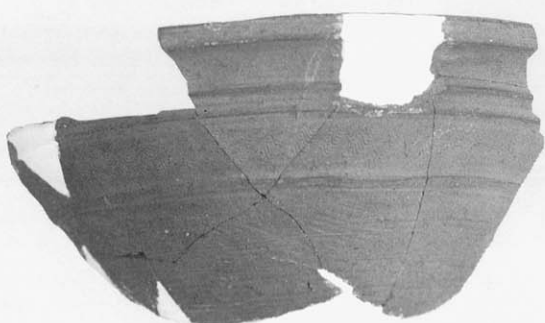
26



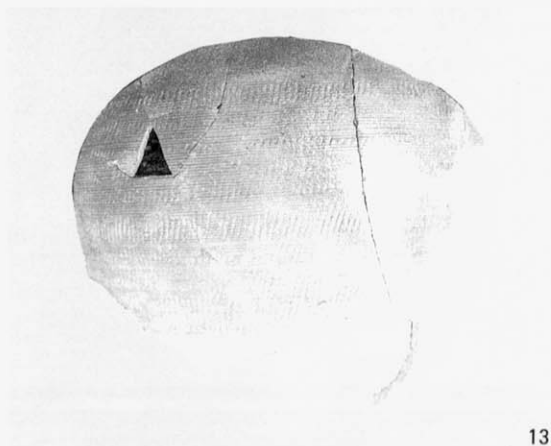
27



11



12



13



14



15



16



17(表)



17(裏)

大宰府条坊跡

第 112 次 発 掘 調 査

筑紫野市文化財調査報告書

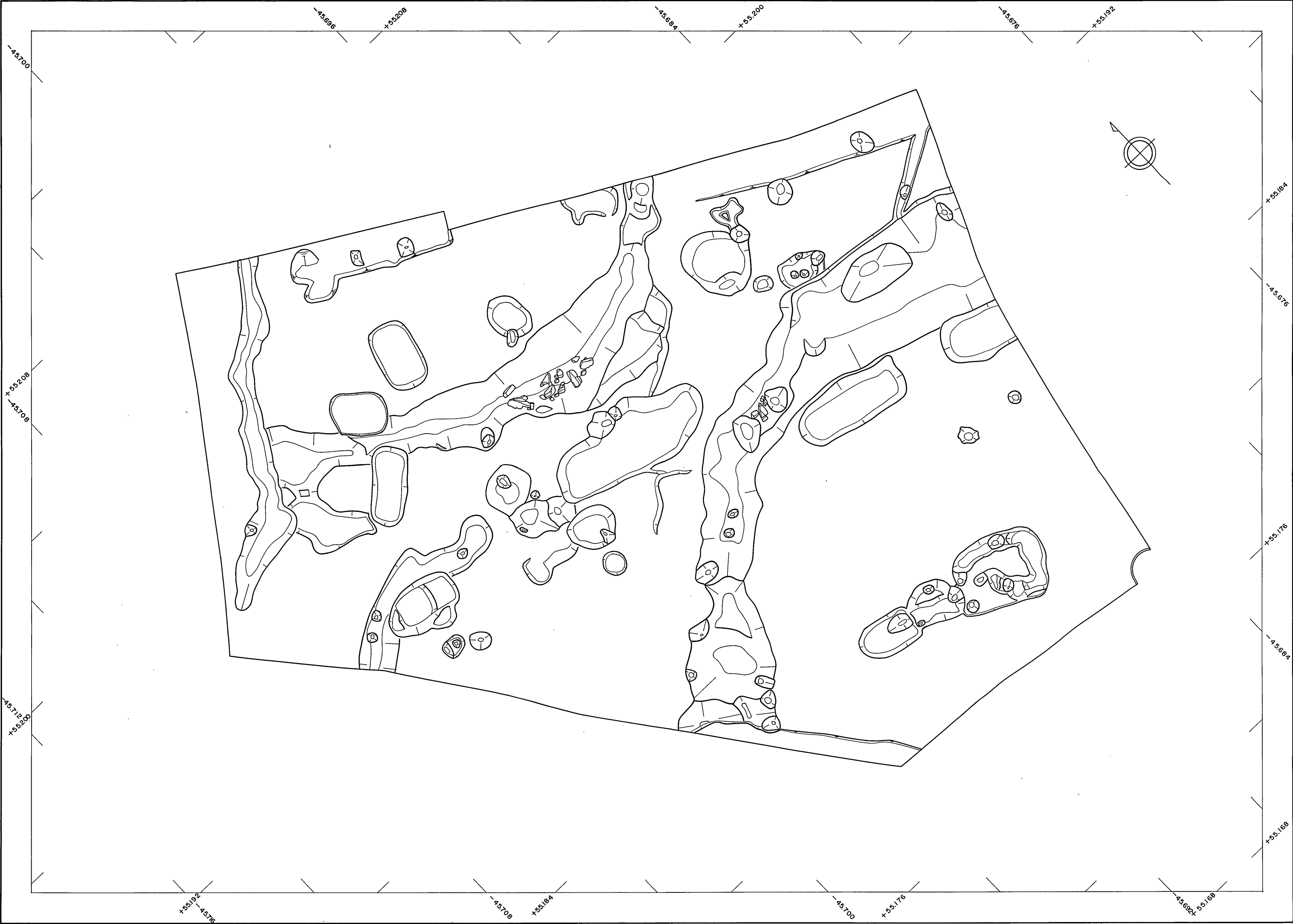
第 31 集

平成 4 年 3 月 31 日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印 刷 株 式 会 社 川 島 弘 文 社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-41

大宰府条坊跡第112次発掘調査



1:100

